

「暮らしの中の美術展」と言う市民ファーストの見方に立てば、その在り方は大きく変わるのではないのでしょうか？

今の美術企画展がそのように変わるだけで、大きく変わる「節目」になるのではないのでしょうか？

多くの「節目」を積み重ねて流れの変わる「潮目」が来るのではと思っています。

日本の文化の神髄はこの「節目」「折り」の多く積み重なるからではと、新たためて思った元旦の一日でした。気持ちが幾分、スッキリした一日でもありました。

■おびにおん・提言 2■

「心に届ける」ということ 書部 福永 佳水

昭和11年に33歳で亡くなったアマチュア写真家が撮影した1000枚程のガラス乾板が、信州、松本の農家で見つかった。

80年の時を超えて私達の目の前に表れたこれらの写真を茨木市立ギャラリーで展示する機会を頂いた。

写真展の会場探しから始まり、6日間の展示に立ち会って、ギャラリーの有り様に接したし、プロ、アマの写真家、デザイナー、画家、現代美術作家、クラシックカメラマニア……、年代も様々の人がそれぞれの感性で鑑賞されて、その目線が多様で実に面白かった。

何よりも、駅ビルで改札口近くの飲食店街にあり、市民の生活に溶け込んで立地する市民のためのギャラリーで展示出来たことは幸いだっただ。

待合せの時間つぶしや、いつもの買い物や散歩で通りがかった人が足を止め、作品に見入り、涙を流して感謝のこぼれを下さったのは一人や二人ではなかった。

『心が動く』のを目の当たりにした。

撮影した人も、埃にまみれたガラス乾板を見つけた人も、それらを再現、プリントして私達の目の前に引き出してくれた人も、激しく心が動いたのだし、その感動が見る人の心を動かした。美術のジャンルや知識や技術と無縁の人達が作品から多くのメッセージを受け取って涙されたのだと思う。

この写真展を企画した人は、莫大な時間をかけて一点、一点の作品を丁寧に復元し、それぞれの作品に見合った紙 or キャンパスを選び、適切なサイズでプリントし、額を作り、可能な限りの取材で撮影者の意図を探り、背景・時代をキャプションに書いた。

途方もなく時間と手間のかかるそれらの工程は、見る人の「心に届ける」為に必要だったのだと思う。

心に響く作品を作ることも難しいが、人の「心に届ける」ことも難しい。どれを怠っても作品は完成しないのではないか。 そんな事を今思っている。



唇を真一文字に結び一点を睨む若者たち
覚悟を決めたようにも見えるその表情
誰も笑ってはいない この後…
彼らもまたそれぞれの戦地に赴くことになる
撮影者は彼らの何を引き出そうとしたのか



横内 勝司写真集・時を超えてより

横内 勝司写真展・時を超えて

列島で猛威を振るう自然災害
加えて人為的な環境汚染への不安
一方で、それとはまったく無関係に回り
続ける経済社会のお祭り騒ぎ
益々広がる格差社会への失望と先の見えない閉塞感から戦後70年を経過した平成の世に再び不穏な空気が流れ始めた
貧しくても、便利じゃなくても皆が笑顔だった豊かな時代
この国が美しくかった最後の時代 横内勝司が生きた時代
そんな時代から80年の時を超えて届いたメッセージ

「おびにおん opinion」

このコーナーも2回目を迎えました。美術協会にも、もう直ぐ70周年がやって来ます。

1949年結成以来68年になります。後2年後には70周年を迎えようとしています。

そんな中で美術協会の会員が自由闊達に美術協会の将来をこうしたい、こうありたいとの思いを語る場として、このスペースを設けました。決められたことを発信するのではなく、日々思い悩み、自分だったらとの思いを提言していただけたらとの思いからです。従ってこのスペースはあくまでも**自由な提言**であるべきだと思います。**制約の無いスペース**と認識いただき発信させていただきたいと願っています。

そのためにも皆さんの思いを是非、投稿して下さい。発しなければ伝わらないのです。

美術協会の会員一人一人の中に**クリエイター・プロデューサー・アートディレクターとしての資質と能力**を持ち合わせなければ美術協会は生まれ変われない時代になったのではと痛感します。（強いて言うなら見る側の視点や、感性も必要なのかも知れませんが）70周年を迎える美術協会としてこの**「心に届ける」**活動を会員の芯として日々心がけて行きたいものです。

広報部長 北井 勲